

宗教入門
— 世俗化と浄土真宗 —

石田慶和

宗教入門 ― 世俗化と浄土真宗 ― 目次

第一章 宗教とは何か

人生と宗教 ― 宗教的要求	7
世俗化と人生の意味 ― 生死を超える	31
科学的世界観と宗教 ― 往生浄土	48

第二章 仏教としての浄土真宗 ― めざめの宗教

さとりとめざめ	67
さとりとすくい	83
智慧と慈悲	98

第三章 浄土真宗の本質 ― すくいの宗教

慈悲 ― 生死の迷い	115
念仏の信心・信心の念仏	133
「還相」の今日的意義	148
浄土 ― 人生の洞察と苦悩の解決	164

第四章 問われる宗教者の姿勢

科学と浄土真宗	181
教団の今日的課題	205
教学の本質と使命 ― 如来回向の信心	230
あとがき	266
刊行にあたって	271
初出一覧	272

嵩 満也

*聖教の引用については、
『浄土真宗聖典(註釈版)第二版』は『註釈版聖典』
『浄土真宗聖典(七祖篇)註釈版』は『註釈版聖典(七祖篇)』
と略記しています。

第一章 宗教とは何か

人生と宗教 — 宗教的要求

生きることの意味

私たちが生きているこの現代の世界は、親鸞しんらん聖人しょうにん（一一七三—一二六三）や蓮如れんにょ上人しょうじん（一四一五—一四九九）のいらつしゃった頃の世界とはすっかり変わったものとなつています。それはただ時代が違うというだけのことではなく、人間の考え方もいろいろなものあり方など、すべてにわたって変わってしまったと言わなければなりません。毎日の生活、衣食住、交通・通信の手段、社会の制度、政治や経済の構造等、五十年、百年ほど前の状態とは比較できないほど変化しています。

その変化を推進したのは、言うまでもなく近代科学とその応用である技術の力です。自然科学の分野での発展だけではなく、社会科学・人文科学の分野でも、多くの成果があげられ、人間と世界に関する知識は飛躍的に増大しました。その結果、人間の生活は改善され、便利になり、多くの病気は治療され、平均寿命も

長くなりました。しかしその反面、いままでとはちがった問題が出てきたことも否定できません。

生命倫理や環境汚染の問題もそうですが、それよりも大きな問題は、人間が自らの生きる意味を見失ったという問題です。何のために生きているのか、何を目的として人生があるのか、そういう問いに対して答えが見いだせなくなってしまうのです。それは近代科学の世界や人間についての見方が、それ以前の宗教的な見方とまったく異なっているということと無関係ではありません。世界や人間についての見方が根本的に変わってしまったことによって、私たちは生きていることの意味や目的を見失ってしまったのです。

たとえば、この世界は何億光年という広がりをもった宇宙空間であり、その中には太陽系を含むような小銀河宇宙が無数に存在し、その全体は現在も猛烈な速度で拡大しているといった世界観、しかもそのような宇宙は、個々の人間の生死になんのかかわりもなく、物理的な生成と消滅をくりかえしているといった世界

観は、いったい人間存在にどんな意味を与えるのでしょうか。そういう広大な世界の中で、人間はほんの一瞬、地球という小惑星の上で生命を営む存在にすぎず、多少の長短はあっても、プランクトンや微生物などと同じことになるでしょう。そこには、底知れぬ虚無感というものがただよっています。

また、人間は生物学的には他の哺乳類ほにゅういと同じで、進化の過程から言えばチンパンジーやゴリラと親近関係にあるという見方は、「万物の霊長」といった人間観や、ロゴスをもった存在という捉え方とは異質のもので、もちろん、そのことによって生物としての人間の理解は深まったでしょうし、それによって医療が進歩したことは確かでしょうが、人間存在の独自の意義というものは見失われてしまいます。人間は他の動物と同じように、ある条件の下で生きたり死んだりしているだけのことです。特別な使命をもっているわけではなく、特別な位置を与えられているわけでもありません。

そうした世界観や人間観には、個々の人間に生きる意味を与えたり、目的を示

したりするものが何もないのです。そこで人間は現実の生活の中で直接に生き甲斐や目的を見いだそうとします。それが地位や名誉や家庭や財産であり、仕事や趣味なのです。しかしそうしたものはすべて相対的なもので、絶対的なものではありません。ということは、結局のところ生きる意味や目的にはならないのです。一時的に熱中できても、究極的に心を捉えるにはいたらないのです。それに、多くの障害や困難が襲います。そこで人間は深い絶望や挫折を経験せざるをえません。宗教の問題は実はそこから起こってくるのです。

相対的なものと絶対的なもの

NHK早朝のラジオ番組に「このころの時代」という放送がありますが、その中でこういうことを聞きました。あるクリスチャンの女性医師が、病気で亡くなる前にフランスのルルドへ巡礼をされました。ルルドはヨーロッパではよく知られた場所で、奇跡が起こると言われていて、多くの人たちが巡礼をされるのです。

おそらくその医師も奇跡を願ってその地を訪れたのでしょう。ところが、そこで彼女は治療の困難な病気をもった多くの子どもたちを見ました。そして、もしも奇跡が起こるなら、自分にではなくて、この子どもたちに起こってほしいと祈ったということです。

私はそれを聞いて、奇跡ということはそういうことだと思いました。子どもたちを見るまでは、その医師は自分の病気が奇跡的になおることを願っていたのかも知れません。神仏に祈るということは、ふつうそういうことです。しかし、難病で苦しむ子どもたちを見た時、その人の心に大きな変化が起こったのです。自分よりも、この子どもたちに奇跡が起こってほしいという気持ちは、自分のいのちよりも大切なものがあるという発見です。そういう転換を起こすということが、奇跡というものではないでしょうか。

合理的・科学的な考え方では奇跡は否定されます。その医師も健康な間は決して奇跡を認めなかったでしょう。しかし、自分が不治の病気になると奇跡をもと